FUKUCHI
Public Relations
No.247
July
広報ふくち
2026
7

◉特集

福智山断層帯地震

初めて明らかになった被害想定、その最悪のシナリオに備える。

一秒でも早く一人でも多く救うために。

いつ発生するか分からない大地震に備え、田川地区消防本部の隊員は、災害現場さながらの緊張感の中で、日々技術を磨いています。

地震発生後の建物火災など、過酷な状況を想定し、歯を食いしばりながら救出訓練に励む、今年入隊した上尾飛勇（うえおひゆう）隊員（福智町出身）

特集

福智山断層帯地震

県の調査結果で示された最悪の被害想定から、その備えを考える。

命守る備えを

生き抜く知識を

活断層地震危険度ランク **Sランク**

死者想定数 約400人
福智町内▶約20人

重傷者想定数 約600人
福智町内▶約20人

負傷者想定数 約5千200人
福智町内▶約200人

発災当日避難者数 約7千900人
福智町内▶約1200人

1週間後避難者数 約8千人
福智町内▶約1400人

震災直後断水人口 約6万3千人
福智町内▶約6500人

帰宅困難者数 約45万3千人
福智町内▶約1500人

避難の選択は

地震発生確率は3%

しかし熊本地震は0.9%で発生した

家の耐震は

揺れによる全壊 約5千300棟
福智町内▶約200棟

揺れによる半壊 約2万4千棟
福智町内▶約800棟

↑熊本地震で夜間の救助作業に当たる消防、警察、自衛隊。田川地区消防本部も加わり、内陸直下型地震の脅威を目の当たりにした。

町を貫く断層

福智山断層帯（内陸・直下型）

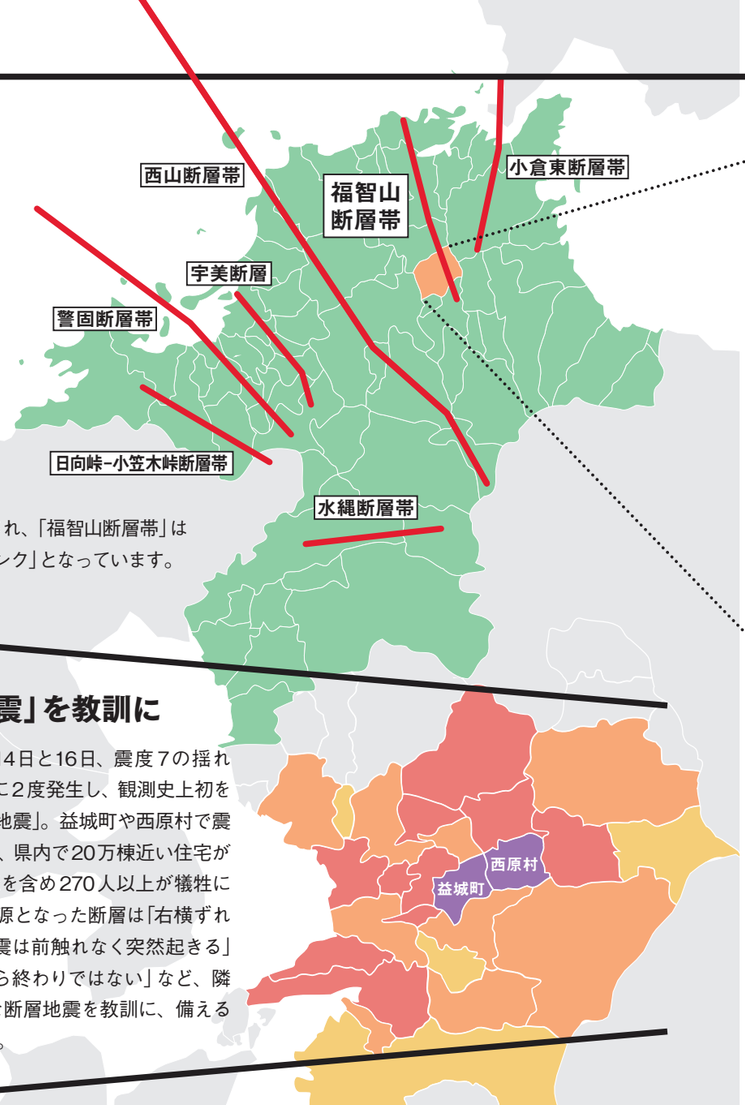
地震を知る

県の調査結果から被害想定が初めて明らかになった「福智山断層帯地震」。その特徴を知り、影響を想像することが「必要な備え」へとつながります。

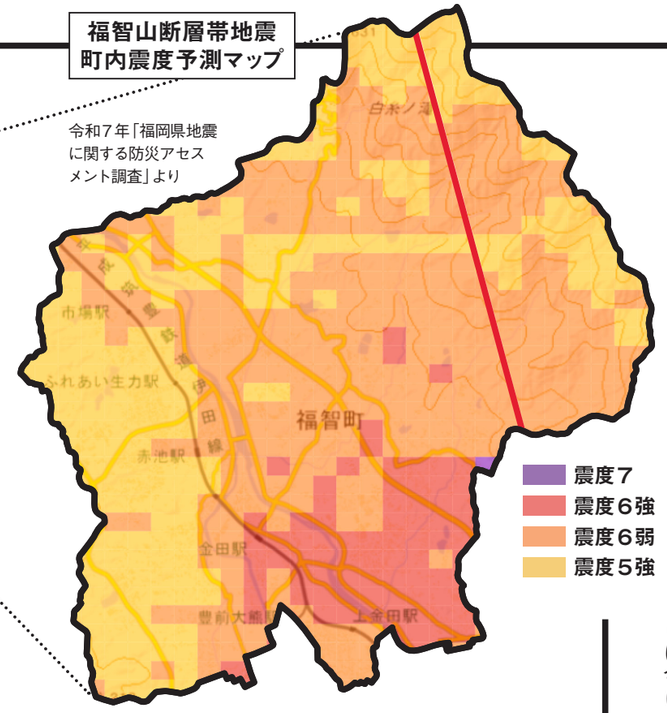
福智山断層帯地震の概要

- 活断層地震危険度ランク▶Sランク
- マグニチュード▶7.2（地震の規模）
- 最大震度▶7（揺れの強さ）
- 断層長さ▶28km（左横ずれ主体の断層）
- 30年以内の地震発生確率▶0～3%

過去に岩盤が割れてズレた痕跡で、再び動く可能性がある「活断層」は県内に7つあります。そのひとつの「福智山断層帯」は、北九州市から福智町を経て、田川市まで分布。日本の活断層は30年以内の地震発生確率に基づいて4つのランクに分類され、「福智山断層帯」は危険度が最も高く、特に警戒が必要とされる「Sランク」となっています。



福智山断層帯地震 町内震度予測マップ



令和7年「福岡県地震に関する防災アセスメント調査」より

大地震を知ることが命を守る第一歩

世界で起こるマグニチュード6以上の地震の約20%が発生している「地震大国、日本」。4つの巨大なプレート（岩板）がぶつかり合う「変動帯」の上に位置し、地震が絶えず起きている列島です。令和7年に日本で震度1以上を観測した地震は4千400回以上、震度4以上は112回、震度5弱以上は15回を数えます。さらに今は、地震学上の多発期を迎え、日本列島全体で地震活動が活発化しています。

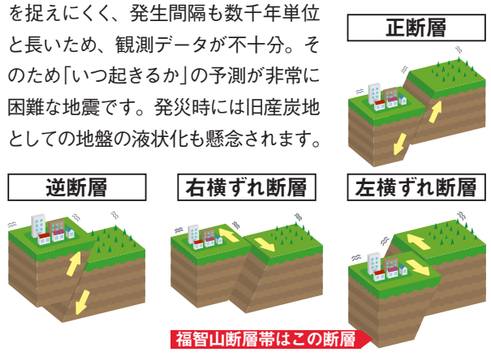
「阪神淡路大震災」「東日本大震災」「熊本地震」… 突如として生活が奪われ、家族や地域が分断される現実はまだ記憶に新しいところ。私たちの暮らしは常に地震と切っても切れない関係にあります。まずはこの町に横たわる「福智山断層帯」と地震の影響を知ることが命を守る第一歩。発生する地震は避けられませんが、準備をすることで被害を最小限に抑えることができます。

熊本地震は0・9%福智山断層帯は3%

福智山断層帯での地震発生確率は、国の研究機関の評価で「30年以内に最大で3%」とされています。この確率は低く感じるかもしれませんが、実際に被災前の熊本地震は「30年以内に0・9%」の評価で発生しました。発生時期の予測が極めて困難な内陸直下型地震は、いつ発生してもおかしくないという前提で、日頃から備えておくことが重要です。

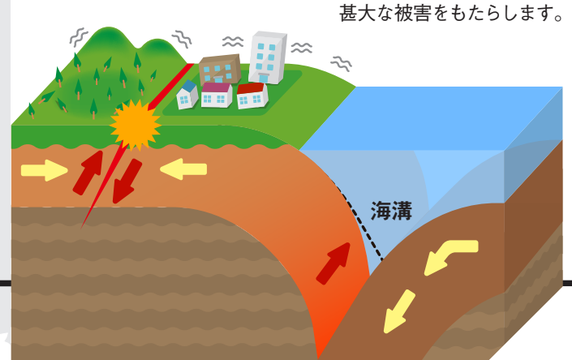
断層の種類と内陸型地震の予測

断層の種類は4つあり、福智山断層は「左横ずれ主体の断層」です。内陸型地震は海溝型のように広範囲の地殻変動を捉えにくく、発生間隔も数千年単位と長いため、観測データが不十分。そのため「いつ起きるか」の予測が非常に困難な地震です。発災時には旧産炭地としての地盤の液状化も懸念されます。



内陸型地震の発生のしくみ

海のプレートの動きが陸のプレートを圧迫し、内陸部の活断層に力が加わり続けると、蓄積されたエネルギーが急激に解放され、地震が発生します。内陸・直下型の地震は震源が浅い傾向があり、発生すれば局地的な激しい揺れと甚大な被害をもたらします。



隣接県で突然発生した「熊本地震」を教訓に

→熊本地震の衝撃と教訓を忘れないようにと今も残されている「阿蘇大橋」の崩落した一部

2016年4月14日と16日、震度7の揺れが28時間以内に2度発生し、観測史上初を記録した「熊本地震」。益城町や西原村で震度7が観測され、県内で20万棟近い住宅が被災し、関連死を含め270人以上が犠牲になりました。震源となった断層は「右横ずれ断層」。「大地震は前触れなく突然起きる」「一度揺れたから終わりではない」など、隣接県の大規模な断層地震を教訓に、備えることが大切です。

「海溝型」と「内陸型」の地震の違い

→熊本地震で倒壊した阿蘇神社

	海溝（プレート）型地震	内陸（直下）型地震
特徴	小さな縦揺れ後、大きな横揺れ	突発的で突き上げるような強震
範囲	広範囲に数分間の揺れ	局地的に数10秒の揺れ
被害	家屋の倒壊、火災、津波等	家屋の倒壊、火災等
予測	数百年周期で予測可能	数千年周期で予測困難
事例	東日本大震災	阪神淡路大震災、熊本地震

「まだ起きない」からの意識転換を

福智山断層帯地震では町内で10～20人の死者が想定されており、決して他人事とは言えない状況です。内陸直下型地震は突然強震が襲うため、その時と場所に合わせた身を守る初動が重要。減災には日頃の備えが欠かせません。県内7つの活断層のうち、地震発生確率があるのは「警固断層」と「福智山断層」のみ。活動可能性が高い「活きている断層」として2つが突出しています。熊本地震での低かった発生前の確率を踏まえ「まだ起きない」という意識から「いつ起きても」という行動への転換が求められています。

田川地区消防本部
予防課長
田中（たなか） 伸幸（のぶゆき） さん

激震から命を守る心得

「ドン！」と突き上げるような突然の揺れで局地的に激震をもたらす内陸・直下型地震。考える猶予のない「その時」の心得を確認します。

福智山断層帯地震 福智町内の被害想定

- 死者▶20人（建物倒壊による死者▶10人）
- 建物倒壊による重傷者▶20人
- 負傷者▶200人
- 揺れによる全壊棟▶200棟
- 揺れによる半壊棟▶800棟

「0点防災」を防ぐ

直下型地震は、真下から突き上げるような激しい縦横の複合揺れが特徴。建物の構造と状況によって被害は変わります。そこで重要なのが、建物の耐震性です。地震の際は「まず机の下に」と言われますが、旧耐震の住宅は緊急地震速報の後、屋外への避難が最適な場合もあります。また、建物の損傷はその後の余震での倒壊を招きかねません。ただし、屋外に出る場合は、ブロック塀や落下物などの危険があるため、日頃からの周囲の危険確認が大切です。発災直後は行政機能も混乱するため、自ら命を守る意識が欠かせません。防災に100点はありませんが、「何も知らない、何もしない」という0点は避けられます。日頃からの備えが、減災の命綱です。

福智町防災アドバイザー
（株）かんがえる防災 代表
髙木（たかき） 敏行（としゆき）さん

事前確認

死因8割の圧死を防ぐ

内陸・直下型地震の直接死因は建物倒壊が8割

熊本地震で倒壊した家屋

「阪神淡路大震災」や「熊本地震」の揺れで亡くなった人の8割が住宅の倒壊などによる圧死でした。「福智山断層帯地震」での町内被害想定では、建物倒壊による死者が10人、重傷者20人、建物の全壊は200棟、半壊は800棟におよびます。まずは建物倒壊を防げば、人的被害を大幅に減らすことができます。

築45年超の木造

町内に約2千800棟

建築耐震基準は昭和56年6月に改正され、阪神淡路大震災を機に平成12年6月に厳格化されました。町内に約2千800棟ある昭和56年5月以前の木造建物は耐震性のチェックを。県の耐震アドバイザー派遣診断では、利用者負担6千円（簡易診断3千円）で耐震性を確認できます。

問生涯あんしん住宅
☎092-582-8061

ポイント

命を守るを最優先に

緊急地震速報の猶予時間は数秒～数十秒の可能性も

熊本地震で倒れた門柱と塀

「福智山断層帯」のような内陸・直下型地震では「緊急地震速報」の猶予時間が数秒しかない可能性があります。地震に遭うと呆然としてしまい、適切な判断が難しくなります。その時、いち早く我に返り、自分自身と家族の命を守る行動に移せるよう家庭の状況に応じた「避難プラン」を立てておきましょう。

猶予時間の行動

建物の耐震で変わる

発災時に身を守る行動は、自分がどこにいるか、家にいる場合は耐震性によって違ってきます。耐震性が高ければ丈夫なテーブルの下へ。猶予時間があれば台所の火を消し、落下物の少ない場所へ。耐震性が低ければ倒壊を避けるため迷わず家の外へ。地震発生までの数秒から数十秒の間の行動が、命を左右します。

屋内で発災

落下物から身を守る

激しい揺れで凶器になる家具や家電から離れる

熊本地震で落下した天井

地震の際に大切なのが、落下物から身を守ること。家の耐震性が高ければ、その場で頭部や腹部を守りながら揺れが収まるのを待ちます。丈夫なテーブルがあれば、その下で低い姿勢をとります。震度によって物は凶器と化します。特に、居間や寝室、台所で物が倒れないような対策を取りましょう。

部屋を確認

家具固定と安全地帯

家の中の一部屋だけ、あるいは部屋の一角だけ、何も落ちてこない、物が倒れても当たらない安全地帯を確保しておきましょう。猶予時間があればそこに逃げます。大きくて重い家具や家電はしっかり固定を。寝室には背の高い家具を置かないようにしましょう。キッチンは危険なので、まずは離れて身の安全を守ります。

屋外で発災

混乱避け冷静に対応

公園などできるだけ広い場所への避難が安全

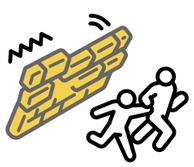
熊本地震で圧し潰された建物

外出先の街中では看板や割れたガラスの落下、ブロック塀の倒壊に注意し、丈夫なビルのそばならその中へ避難します。公園など、できるだけ広い場所への避難が安全。列車やバスの車内、階段では、重心を低くして手すりにしっかりつかまりましょう。車は左に寄せて、揺れが収まるまで待機を。

外出先でも

危険から離れる意識を

揺れを感じたら外出先でも「身を守る」「つかまる」「危険から離れる」の3つを意識してください。エレベーターでは全ての階のボタンを押し、最初に停止した階で降りるのが原則。屋外では近くに塀や電柱、自動販売機や大きな看板などがないか確認を。職場や施設では安全な場所に待機することも検討してみてください。



発災直後

落ち着いて安全確認

家族や自宅の中の安全と火災発生の危険を確認

熊本地震で寸断された道路

火の始末は揺れが収まってから。出火していたら落ちついて消火します。ガラスの破片などがあるため、必ず履物をはいて行動を。余震に備え、避難できるよう戸を開けて出口を確保します。玄関先では瓦やガラスなどの落下、外では道路崩落の危険性があるため、状況を確認しながら慎重に移動しましょう。

避難通路

封鎖する物は置かない

物だけでなく揺れの歪みでドアが開かず屋内に閉じ込められることがあります。大声を出し続けると体力を消耗するため、硬い物で壁などをたたいて存在を知らせましょう。体力温存のためペースを配分し、そばで人の気配がしたら声を出して助けを求めます。日頃からドアや避難経路をふさぐ物は置かないようにしましょう。

「在宅避難」か「避難所」か

判断基準は常に「身の安全」

地震後に自宅や周囲に危険がなければ、次は「自宅で生活が続けられるか」を判断。その後の余震の影響も想定し、不安に感じたり危険と判断したら避難所への避難を決断しましょう。

福智山断層帯地震 福智町内の被害想定

- 発災当日避難者数▶約1200人
- 1週間後避難者数▶約1400人
- 1箇月後避難者数▶約1400人
- 断水人口（直後）▶約6500人
- 停電件数▶約60件
- ガス漏洩（ろうえい）被害件数▶約100件
- 道路の被害箇所数▶約20箇所
- 帰宅困難者数▶約1500人
- 居住制約世帯数▶約2900世帯
- 食料・飲料水制約世帯数▶約2800世帯
- 通信（携帯）停波基地局率▶約1％

2段階で避難を判断

判断❶ 自宅の危険を見極める

チェックポイント
- □ 自宅に被害や倒壊のおそれがあるか？
- □ 隣家の倒壊などで自宅に影響があるか？
- □ 火災の二次災害や余震後の心配はあるか？

危険がなければ判断❷へ

不安に感じたり危険と判断したら迷わず率先して避難所へ

判断❷ 生活ができるかを確認

チェックポイント
- □ 他人のサポートがなければ暮らしていけないか？

自宅での生活ができなければ避難所へ

不安がなければ自宅にとどまる

避難所

在宅避難

「難」を「逃」れる選択を

避難所の受け入れは、自宅が全半壊するなど、在宅避難が不可能な人が優先されます。地震後に耐震性の自宅が無事なら、そのまま自宅で生活する「在宅避難」の選択が有力になります。

「在宅避難」では「プライバシーが守られる」「自分に合った寒さ・暑さ対策」「幼い子どもなど個別ニーズへの対応」「ペットと一緒」「空き巣被害」などの課題に対するメリットがあります。

避難先の判断は人任せにせず、行政情報や自分の目で確かめた状況を基に判断してください。また、被災していない遠方への避難も選択肢の一つです。支援物資は、状況が落ち着けば避難所で受け取ることができます。

↑熊本地震で避難所に集められた支援物資の配給

↑ブレーカーを落とし、ガス・水道の元を閉めて避難。

↑車両移動が不可能になった熊本地震の道路崩壊。

避難所へ

危険だと判断したら、
ためらわず、迷わず、
命を守るため避難所へ。

在宅避難

自宅に危険がないなら、
最も身近な場に身を置く。
命を守る備えを習慣に。

↑熊本地震の直後、店舗で空になった食料品の棚。

↑地震直後に水道水が出るなら断水の前に確保を。

備えたい「持出品」リスト

水／非常食／モバイルバッテリー／常備薬／救急用品／お薬手帳／マスク／消毒／ラジオ／懐中電灯／電池／衣類下着／タオル／スリッパ／ティッシュ／ウェットティッシュ／ポリ袋／洗面用具／ハンカチ／現金／軍手／カイロ／ライター／はさみ／方位磁石／雨具など

↑避難時にすぐ持ち出せる「防災リュック」の準備を。

「防災リュック」を備える

避難を想定し、背負って両手が使える「防災リュック」を準備しましょう。当面必要となる最小限の物を中に納めます。玄関近くにあれば、いざという時に素早く持ち出せます。乳幼児、高齢者、女性、アレルギーなど個別の状況に合わせ、必要な物を追加して備えましょう。

「備蓄サイクル」で備える

ライフラインが被害を受けると、復旧までの間、電気・ガス・水道が使えなくなります。そこで、食料品や生活必需品を日頃から多めに備え、消費分を買い足していく日常備蓄「ローリングストック」が有効です。最低でも3日分、できれば1週間分備えておきましょう。

↑日常利用の食料や生活必需品を少し多めに購入。

備えたい「備蓄品」リスト

飲料水（1人1日3ℓが目安）／コンロ・ガスボンベ／ポータブル電源／米／保存食／医療品・常備薬／衛生用品／ラジオ（ソーラー発電）／懐中電灯／簡易トイレ／ビニール袋／ポリ袋／ラップ／トイレットペーパー／ティッシュ／クーラーボックス・保冷剤／新聞紙など

最悪を想定内に

熊本地震「奇跡の避難所」を当時西原村で運営した

熊本県西原村議会議員 **堀田（ほりた） 直孝（なおたか）さん**

震度7の揺れは破壊的で、死を感じました。当時私は役場の管理職。道路も寸断され、自己判断で避難所運営に当たりました。学校には重症者も含め5百人以上が避難し、職員は5人。救急車は来ない。「飯は」「水は」と詰め寄られる。パニック状態の中、「役場は当てにしないで、私たちで生き抜きましょう」と呼びかけ、各家庭の備蓄品を持ち寄り、支援物資が届くまで生き抜きました。被災地では「まさか」と人々が口にします。しかしその「まさか」を「もしも」で考えてほしいのです。地震と豪雨が重なったらどうなるか。私は今でも最悪を想定しています。

「震災関連死」を防ぐ

熊本地震では50人の直接死をはるかに上回る200人以上の「関連死」が発生しました。「関連死」とは、避難生活による体調や持病の悪化、精神的ストレスなどが原因で亡くなること。大地震では直後だけでなく、その後の避難生活のあり方が命に関わります。

熊本地震では、余震への不安から多くの人が車中泊を続けました。その結果、エコノミークラス症候群、水分・運動不足、持病の悪化、ストレスなどが原因で多くの「関連死」を招き、特に高齢者が影響を受けました。

住み慣れた環境で生活できる「在宅避難」は、様々なメリットがありますが、そのためにも日常の備蓄が重要です。

↑熊本地震で余震を警戒しながらの屋外炊き出し。

地震の避難先 ■指定避難所、■緊急避難場所

町内には15の「指定避難所」がありますが、災害が「地震」か「風水害」かによって変わります。地震の際は掲載の14施設。各学校のグラウンドも一時緊急避難が可能です。

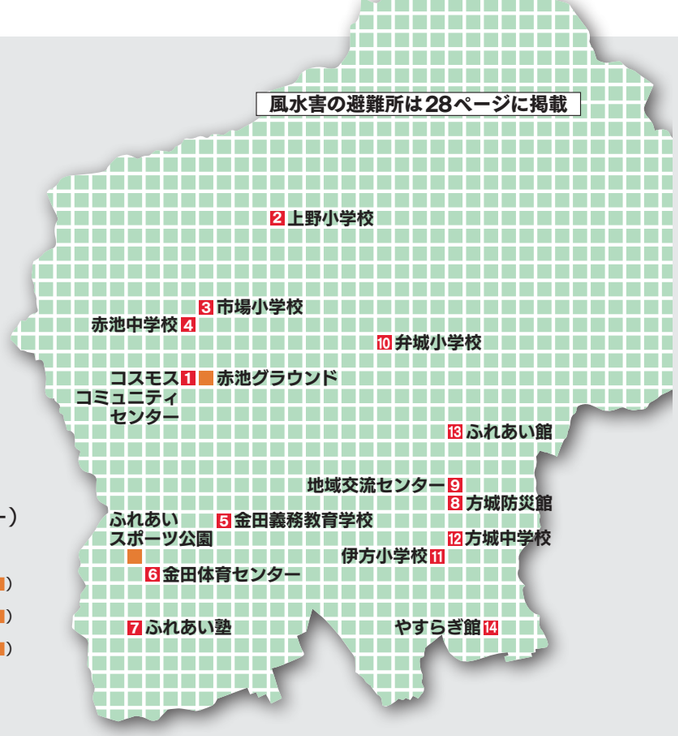
地震の際の町内指定避難所

「指定避難所」は、避難した住民のみなさんが災害の危険性がなくなるまでに必要な期間滞在し、災害によって自宅に戻れなくなった際に、一時的に居住する施設です。

〈赤池地区〉
1 コスモスコミュニティセンター
2 上野小学校(グラウンド■)
3 市場小学校(グラウンド■)
4 赤池中学校(グラウンド■)

〈金田地区〉
5 金田義務教育学校(グラウンド■)
6 金田体育センター
7 ふれあい塾

〈方城地区〉
8 方城防災館（旧方城児童センター）
9 地域交流センター
10 弁城小学校(グラウンド■)
11 伊方小学校(グラウンド■)
12 方城中学校(グラウンド■)
13 ふれあい館
14 やすらぎ館



「福智町公式LINE」から確かな防災情報を確認

災害情報ではデマに惑わされないよう、国や自治体等の信頼できる情報源を事前に整理しておきましょう。

「町公式LINE」を登録しておけば「避難所開設情報」や「防災行政無線情報」を確認でき、「デジタル訓練」も活用できます。地震の際は最新の情報をチェックし、余震などに備えましょう。

安否情報の確認

通勤や通学などで自宅にいない状況での家族の安否確認は、自分の安全確保とともに優先する行動です。

地震発生直後は、電話がつながりにくくなる可能性が高くなります。

「災害伝言ダイヤル(171)」や各携帯電話会社の「災害用伝言板」を活用するなど、日頃から家族間で安否確認の方法を決めておきましょう。

知識を行動へ。

今回、初めて明らかになった「福智山断層帯地震」の被害想定。衝撃的な数字が並びましたが、そのデータは、私たちの大切な日常と命に直結するものばかりでした。「自分が、家族が、その数の中に入るかもしれない」。そう思うと、さらに我が身の事として被害想定を受け止めることができます。

私たちは地震を防ぐことはできませんが、行動によって着実に被害を減らすことができます。予測が困難で、瞬時に甚大な被害をもたらす内陸直下型地震。正確な知識が、命を守る判断の力にります。「知識を行動へ」。将来の不安への備えは、日々の小さな行動から始まります。

施設の耐震性に伴って風水害とは異なる「指定避難所」。「金田隣保館」と「大浦隣保館」は地震では指定外のため確認してください。なお、今回新たに改修を終えた「コスモスコミュニティセンター」が「中央公民館」に替わって指定されています。また、方城地区に建設中の「総合体育館」が完成次第、指定避難所に。緊急避難場所に「方城グラウンド」を指定する予定です。

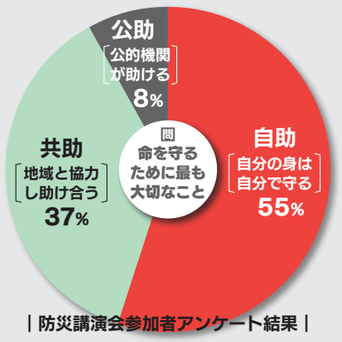
↑防災機能を備える「総合体育館」

↑新指定避難所の「コスモスコミュニティセンター」

自分と大切な人の命を守るために最も大切なこと

熊本地震の教訓をテーマに開かれた6月19日の「防災講演会」には200人以上が参加し、「物」と「知識」の備えの重要性を学びました。参加者アンケートでは「命を守るために最も大切なこと」として、半数以上が「自助」と回答。熊本地震でも発災直後は支援が行き届かなかったことから、何より大切な自分と家族の命を守るための備えの大切さを再認識しました。

町では、県の「福智山断層帯地震」の調査報告や被害想定を踏まえ、3月に「福智町地域防災計画」を改定。発災時に迅速に対応し、被害を最小化するため、住民の皆さんの「自助」と「共助」とともに、災害に備えていきます。



｜防災講演会参加者アンケート結果｜

｜今年改定した福智町地域防災計画｜

自分事とした備えを

大切なのは明らかになった被害想定を自分事として捉えること。日々の暮らしの中での少しの準備、家庭での決めごと、地域での助け合いが「その時」の力になります。

その時に救われる日々の備えが頼り

大地震の際、行政はまず72時間（3日間）の人命救助や消火活動が最優先になり、道路や物流を復活させる役割を担います。また、町が運営する避難所の備蓄にも限りがあります。発災直後の一人ひとりへの初期対応は、行政の「公助」が行き届かないことがほとんどです。「自分の身は自分で守る」、「自分たちの地域は自分たちで守る」という「自助・共助」の考えで備えることが重要です。

地震対策は、「情報」「協力」「継続」を意識する必要があります。発災時には正しい情報に基づく判断が求められ、単独での行動には限界があるからです。備えは継続的に見直し、状態を維持していかなければなりません。

地震への備えを実効させるためには、必要な知識を得て、一人ひとりが情報に目を向け、家族や地域と支え合いながら、習慣として備えを続けていくことが欠かせません。

福智町消防団
世良（せら） 喜彦（よしひこ） 団長

自助と情報が鍵

大地震後は、消防、警察、自衛隊、自治体がそれぞれ特化した対応に当たります。「福智山断層帯地震」の全体被害想定では、死者と重傷者を合わせて約1千人。道路も橋も寸断され、救助の手が行き届かないことが想定されます。常日頃から団員に伝えているのは、まず自分と家族の命を第一に考えること。自助ができなければ地域の方々は救えません。また、住民のみなさんにとっても自助が基本になります。消防団は地域密着型ですが、的確な救助には正確な情報把握と自治会との連携が欠かせません。消防団では本年度、情報共有アプリを導入し、活動の精度を高めていきます。